

東院地区の調査

—第446・469次

1 はじめに

平城宮は約1km四方の東側に東西約250m、南北約750mの張り出し部をもち、その南半約350mの範囲を東院地区とよんでいる。『続日本紀』などの文献から、皇太子の居所である東宮や天皇の宮殿がおかれたことが知られる。神護景雲元年(767)に完成した「東院玉殿」や、宝亀4年(773)に完成した「楊梅宮」は、この地にあったと考えられている。

東院地区ではこれまで南半部および西辺部を中心として発掘調査を進めており、東南隅で奈良時代の庭園遺構を検出したほか、他の箇所では、掘立柱建物群の頻繁な建て替えをあきらかにしてきた。しかし、東院地区全体の詳しい構造や性格は未解明であり、2006年度から5カ年計画で、重点的な調査をおこなってきた。2006～2008年度には東院中枢部と推定される地域の調査をおこない、第401次調査(2006年度)・第421・423次調査(2007年度)では中枢部の西辺を区画すると考えられる施設を検出した。このような成果を踏まえ、東院中枢部周辺の様相を解明する目的から、2009年度は東院地区の西北部で、総柱建物群を検出した第292次(1998年度)・第381次調査区(2004年度)の北側に第446次調査区(1,505㎡、東西43m×南北35m)を、2010年度はさらにその北側に、第469次調査区(850㎡、東西25m×南北34m)を設定した(図202)。調査期間は、第446次調査が2009年10月1日から2010年3月31日まで、第469次調査が2010年4月1日から10月29日までである。

2 周辺の調査成果

調査区の設定にあたっては、高密度で複雑な遺構の変遷を、周辺の調査成果とあわせて的確に捉えるため、第446次調査区は、南辺を第381次調査区と、西辺を第22次南調査区(1965年度)と合計約330㎡、第469次調査区は西側を第22次南調査区と約165㎡重複させた。

約4,300㎡を発掘した第22次南調査区は、西側では大溝SD3410のほか、その東では南北溝SD3236や掘立柱建物、井戸などを検出し、今回の調査区に近い東部分では、

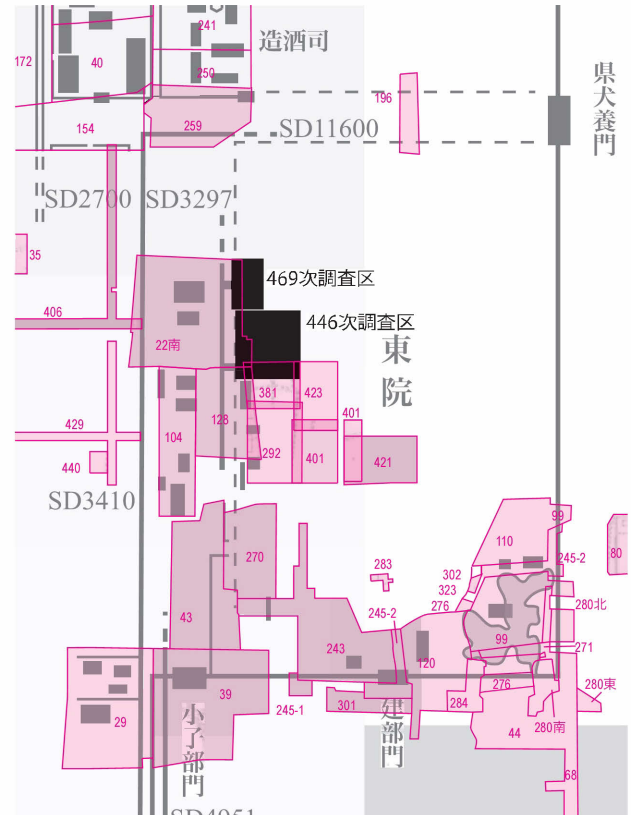


図202 第446・469次調査区位置図 1:2000

南寄りに基壇の上に西面して建つ門SB3116を、北寄りに斜行溝SD3154、東西溝SD3180、東西堀SA3177・3178を検出している。第381次調査区では、その南に位置する第292次調査区、第270次調査区(1996年度)から続く、南北掘立柱堀SA17817などの区画施設や、大規模な総柱建物SB18770をはじめとする掘立柱建物群の建て替えがあきらかになっている。(鈴木智大)

3 第446次調査

基本層序と遺構の概要

調査区の東部は南北に続く尾根上に位置し、西辺3～6mの範囲は水上池から続く低位面に位置する。調査区全体が北東から南西へと傾斜しており、特に低位面への傾斜変換点付近は傾斜が強く、この付近で水田の段差もつけられていた。

基本層序は、整備による盛土の下に、旧耕作土、床土があり、その直下が遺構検出面となる。東部では赤褐色土、灰白色土が縞状に混じる明橙褐色土の地山(標高約66.1m)で、西部では灰褐色土の整地土(標高約64.3m)である。

検出した遺構は、建物11棟（SB19350以外は掘立柱建物）、回廊1棟、掘立柱塀9条、溝5条、井戸1基、不明遺構1基である（図203）。

これらを重複関係、柱筋の位置、周辺の調査成果などから判断して、6期に区分した。1～3期は、第421・423次調査（『紀要2008』）のⅠ～Ⅲ期に、5・6期は、Ⅳ・Ⅴ期に該当し、今回新たに4期を設定した。

（国武貞克・鈴木）

1期の遺構

SB19330 調査区中央北部で検出した東西3間、南北4間以上の総柱建物。柱間は3m（10尺）。柱掘方は約1m四方。時期が特定できない土坑状遺構SX19351周辺の柱穴は浅い。同じく時期が特定できない東西掘立柱塀SA19347と重複し、これより古い（図204-③）。

SC19335 東西12間以上、南北1間の回廊。柱間3m（10尺）。柱掘方は北の側柱と南の側柱の西の4基が約1m四方で、それ以外は約0.4～0.7mと小さい。東端が第381次調査で検出したSB18756の北端に取りつく。SD19343よりも古い（図204-④）。

SA19331 東西塀。SB19330の西南隅柱から6間分を検出した。調査区の西方へ延びる。柱間3m（10尺）。柱掘方は約1m四方。4期の東西溝SD19337より古い（図204-①）。

SA19332 東西塀。柱間3m（10尺）。柱掘方は約1m四方。今回の調査区では5間分検出した。東の調査区外へ続く。西端はSB19330に取りつく。SB19355と重複し、これより古い（図204-②）。

SD19333 調査区のほぼ中央から西方で検出した素掘りの排水溝。約23m分検出した。幅は約0.5mで、深さは西ほど深くなり、もっとも深くなる調査区西壁で0.5m以上ある。SA19331の南の雨落溝を兼ねる。

SF19334 SA19331・19332とSC19335に挟まれた幅約15m（50尺）の道路。調査区を東西方向に横断する。

2期の遺構

SB19340 東西9間、南北4間の総柱建物。柱間は3m（10尺）。柱掘方は約1.2m四方。第381次調査で南1間分が検出されていたが、今回の調査区でその北部3間分を検出した。

3期の遺構

SB19345 東西5間、南北4間の建物。身舎棟通りの

2穴は床東と考えられ、中央の東西3間、南北2間を身舎とした四面廂付建物と考えられる。身舎柱間は2.7m（9尺）。廂の出は3m（10尺）。柱掘方は約1m四方。SD19337より古い（図204-①）。

4期の遺構

SB19350 東西2間、南北9間の建物。今回の調査区では南6間分を検出した。柱間は3m（10尺）。柱掘方は1.2～1.8m四方。東に南北溝SD19337をとまなう。掘方が大きいことと、根石と考えられる石を検出していることから礎石建物である可能性がある。

SB19355 東西5間以上、南北2間の東西棟建物。東は調査区外に延びる。SB19350の東側柱列から50尺の位置に西妻を置き、南側柱列をSB19350の南妻とそろえて建つ。柱間は3m（10尺）。柱掘方は約0.9m四方。SA19332の柱穴と重複し、これより新しい（図204-②）。

SB19360 東西10間以上、南北2間の南北棟建物。第381次調査で検出した建物SB18755（東西2間、南北7間）と一連の建物の可能性がある。柱間は3m（10尺）。柱掘方は約0.9m四方。SD19343よりも古い（図204-⑥）。

SA19336 東西塀。今回調査区では13間分検出した。柱間は、東7間分は3m（10尺）だが、西6間分は2.7m～3.6m（9～12尺）と不規則。柱掘方は約1.0～1.2m四方。

SD19337 SB19350の東側柱列から1.5m（5尺）離れて南北に通る素掘りの溝。約11m分検出した。幅は0.2～0.5m、深さは0.05～0.1m。SB19350の東雨落溝の可能性はある。SA19341より古い。

5期の遺構

SB19365 東西6間、南北3間の総柱建物。今回の調査区では、そのうち、南2間分を検出した。柱間は3m（10尺）。柱掘方は約1.0～1.2m。第381次調査で検出した総柱建物SB18770（東西6間、南北6間）と柱筋が揃い、南北に約28m隔てて東西方向に同一の規模で建てられている。（国武貞克）

6期の遺構

SB19370 東西3間、南北2間の東西棟の総柱建物。柱間は3m（10尺）等間。柱掘方は約1m四方。

SB19375 東西3間、南北2間の東西棟掘立柱建物。SE19346の覆屋と考えられる。柱間は桁行が3m（10尺）等間。梁行は南寄りが2.4m（8尺）、北寄りが3m（10尺）。西南隅にSA19341が、東南隅にSA19342が接続する。

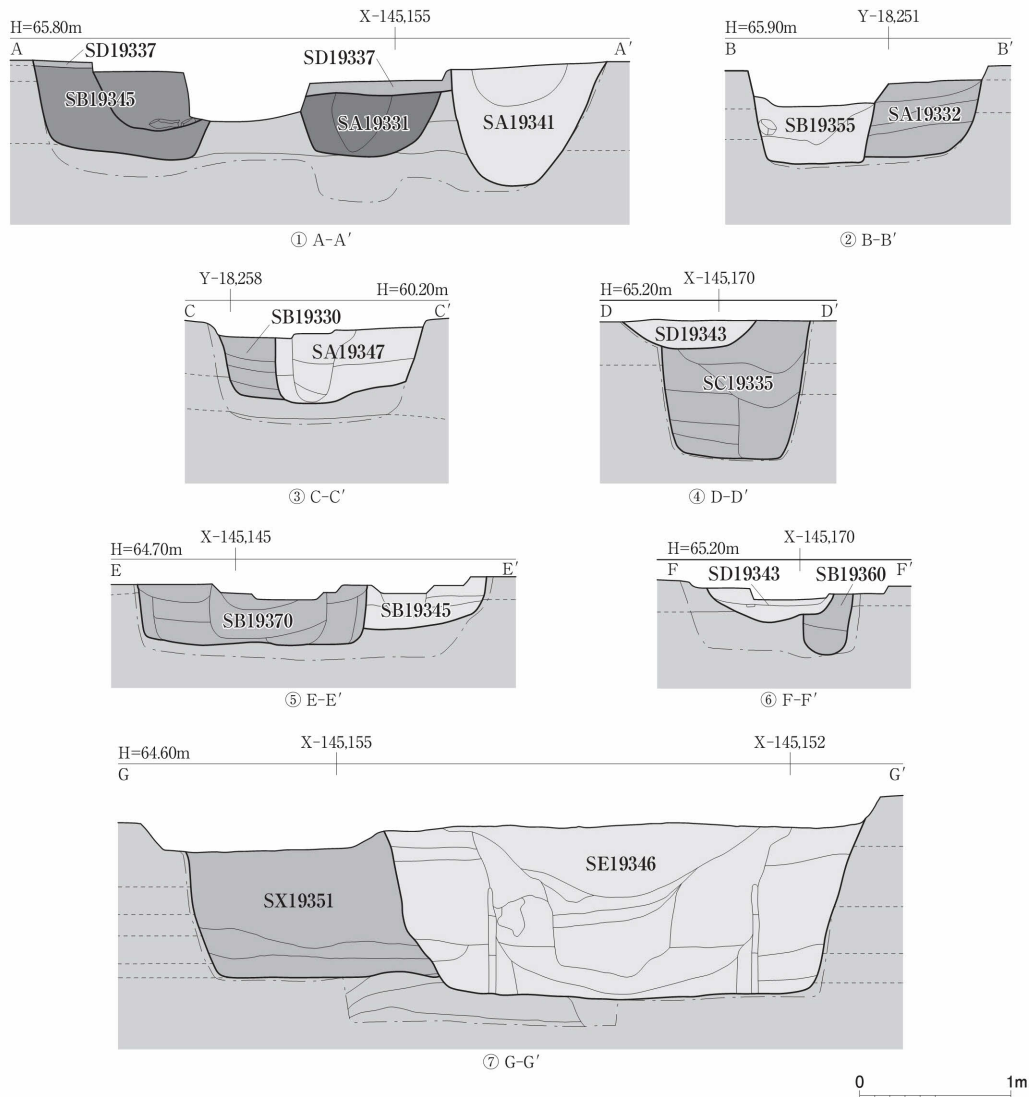


図204 各遺構柱穴断面図 1 : 50 (断割位置は図203遺構平面図を参照)

SA17817 第381次調査区より延びる南北塀。北端の1間を検出した。柱間は約3m(10尺)等間。柱掘方は約0.9m四方。全長16間で、47.2m(160尺)。北端は東西塀SA19339に接続する。

SA19338 SA17817と柱筋を同じくする南北塀。南端は東西塀SA19342の東端に接続し、北端は調査区外へと延びる。本調査区では5間分検出した。柱間は3m(10尺)等間。

SA19339 第22次南調査区で検出したSB3116より延びる東西塀。今回の調査区では12間分検出した。柱間は3m(10尺)等間。柱掘方は0.9m四方。東端は南北塀SA17817に接続する。

SA19341 第22次南調査区で検出したSB3116より延びる東西塀。東端はSB19375の西南隅柱に接続し、同様にSB19375に接続するSA19342と柱筋を同じくする。柱間は3m(10尺)等間。柱掘方は0.9m四方。本調査区では6間分検出した。SA19339と並行しており、間に通路SF19344を形成する。SD19333と重複し、それより新しい。

SA19342 SB19375の東南隅柱に接続する東西塀。SA19341と柱筋を同じくする。柱間は3m(10尺)等間。柱掘方は0.9m四方。東側は南北塀SA19338に接続する。

SD19343 SA19339の北雨落溝。幅0.6~1.0m、深さ0.2~0.3m。約24m分検出した。SB19335、SB19360より新しい(図204-④・⑥)。

SF19344 SA19341・19342とSA19339に挟まれた幅約14.8m(50尺)の東西の道路。舗装面は検出されていない。第22次南調査区で検出された基壇をもつ門SB3116と中心軸を同じくする。第292次調査区で検出した並行する東西塀SA9605とSA17816は幅約10mの通路を形成しており、SF19344は心々距離で約59.7m北に位置する。

SE19346 時期の特定できない土坑状遺構SX19351と重複した位置に掘られた井戸(図204-⑦)。覆屋SB19375をもつ。掘方は約3m四方、深さ1.3m。井戸枠については後述するが、内法寸法が一辺約1.8mで3段分残存していた。(鈴木)

時期が特定できない遺構

SB19380 東西4間以上、南北2間の建物。東の調査区外へ延びる。柱間は2.4m(8尺)。柱掘方は0.6～0.8m四方。SA19347 東西塀。4間分検出した。柱間は2.4m(8尺)。柱掘方は約0.9m四方。SB19330の柱穴と重複し、これより新しい(図204-③)。

SD19348 東西溝。幅0.7m。深さ0.3m。約34m分検出した。重複関係および位置から5期の可能性もある。

SD19349 東西溝。幅0.2～0.9m。深さ0.2～0.3m。約22m分検出した。重複関係および位置から5期の可能性もある。

SX19351 東西2.7m、南北1.5m以上、深さ1.1mの土坑状の遺構。6期の井戸SE19346の南に位置し、これと重複する(図204-⑦)。北寄りをSE19346に壊される。南北の長さは不明である。SE19346と規模と位置が近似するため、井戸枠の抜取穴である可能性がある。時期は6期より古いが特定できない。(国武)

出土遺物

土器 第446次では、整理箱で35箱の土器が出土している。出土土器は土師器・須恵器ともに細片が多く、ことに土師器は器表面の保存状態が著しくわるい。

主要遺構の出土土器についていえば、SD19348の埋土からは土師器杯A、皿A、椀A、高杯、甕口縁部～胴部片や、須恵器杯A、杯Bとその蓋などが出土している。また、SD19343から出土した土師器高杯の脚部は断面七角形で、奈良時代後半のものである。

このほか、SE19346の井戸枠内最下層からは須恵器壺G1個体が単独で出土している。(森川 実)

瓦磚類 第446次調査区から出土した瓦磚類は表32の通

り。6282-6721の出土が目立つ。東院玉殿所用とされる6151A-6760A・Bが7点出土した。

今回の調査区を含む東院中枢部の南・西側は、第292次調査以降、7回(第292次:1998年度、第381次:2004年度、第401次:2006年度、第421・423次:2007年度、第446次:2009年度、第469次:2010年度)調査され、調査面積は約9,800㎡となり、徐々にこの付近の状況があきらかになってきた。以下では、これらの調査区と比較しつつ、瓦磚類の出土状況の特徴を説明する。第469次調査区もここであわせて説明したい。

各次数の100㎡当たりの軒瓦出土点数、丸・平瓦出土重量を比較すると、第292・381・404・421・423・446次(以下、第292～446次と表記)調査では軒瓦が3～6点程度、丸・平瓦が30～45kg程度に対し、第469次調査では軒瓦が22.1点、丸・平瓦が333.0kgであり、著しく多い。

ただし、第469次調査区では包含層から出土した瓦が多い。包含層出土と考えられるものを除き、過去の調査区との重複部分を除くと、第469次調査区は100㎡当たり軒瓦が16.3点、丸・平瓦が43.2kgとなる。各次数とも丸・平瓦は整理中であり、土層の詳細な比較検討もおこなっていないため、仮の数値ではあるが、第469次調査区の瓦、特に軒瓦の出土比率が相当高いことがわかる。

次に、瓦編年第Ⅰ～Ⅱ-1期(和銅から神龜年間〔708～729〕)の軒瓦に注目すると、第292～446次調査区では100㎡当たり1点に満たない。一方、第469次調査区では25点出土し、100㎡当たり2.9点、包含層出土と重複面積を除くと、100㎡当たり1.5点となり、他の調査区と比べ多い。

以上から、第446次調査区の瓦出土状況は、これまで調査してきた東院中枢部の南・西側と同様であり、第469次調査区はこれと全く異なっていることがわかる。遺物の残存状況は様々な条件を考慮する必要があるものの、その違いは大きく、当時の瓦の使用状況を反映していると考えらるべきであろう。

総瓦葺建物を含む第一次・第二次大極殿院、東区朝堂院では、100㎡当たりの軒瓦出土点数は8.6～12.0点(「左京二条二坊十一坪の調査-第279次」『年報1997-Ⅲ』)、総瓦葺である第一次大極殿院西楼、朝集殿院南門では、100㎡当たりの丸・平瓦出土量が207.1kg・140.3kgである。単純な比較は控えるべきであるが、第292～446次調査

表32 第446次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6131	B	1	6572	A	1	切鬩斗瓦	1	
6133	A	2	6663	A	3	箱鬩斗瓦	2	
	D	1		?	1	道具瓦	1	
	J	1	6682	A	1	棧瓦	1	
6135	A	1	6691	A	1			
6151	Aa	1	6719	A	1			
	Ab	1	6721	C	2			
6282	Ba	1		Ga	4			
	B	1		?	4			
	Ca	1	6732	C	1			
	C	1	6760	A	2			
	E	1		B	2			
	G	2		?	1			
	I	1	型式不明		5			
	?	1						
6284	Eb	3						
	?	1						
6308	Aa	1						
6313	Ab	1						
6316	B	1						
	?	1						
型式不明		10						
軒丸瓦計		35	軒平瓦計		29	その他計		5
		丸瓦			平瓦			磚
		凝灰岩						
重量	117.49kg	556.852kg	33.751kg	14.047kg				
点数	965	7385	22	8				

区に総瓦葺建物は想定しにくい。第469次調査区については、包含層出土の丸・平瓦の評価が問題となるが、それを除外しても軒瓦の出土量は多く、調査区内ないしその周辺に総瓦葺建物等、瓦を相当量使用する施設が存在した可能性を指摘しておきたい。

次に、瓦編年第Ⅰ～Ⅱ-1期の状況であるが、東院庭園地区では、大垣部分を除き、この時期の軒瓦が少ないことが指摘されており（『平城報告ⅩⅦ』）、第292～446次調査区もこれと同様であることがわかる。いっぽう、第469次調査区の状況は異なり、天平初年（729）以前に、本格的な利用が開始されていたことをうかがわせる。

このように、第446次調査区の瓦使用状況は、これまでの東院中枢部の南・西側の調査区と同様であり、第469次調査区ではかなり異なっていたと考えられ、屋根の葺き方の違いを反映している可能性があるろう。

（清野孝之）

金属製品（図205） 1は方頭釘。頭部は約2cmで長さは約24cm。SD19348より出土した。2は方頭釘が6本錆着したもの。身の長さが約18cmのものが3本で、約15cmのものが

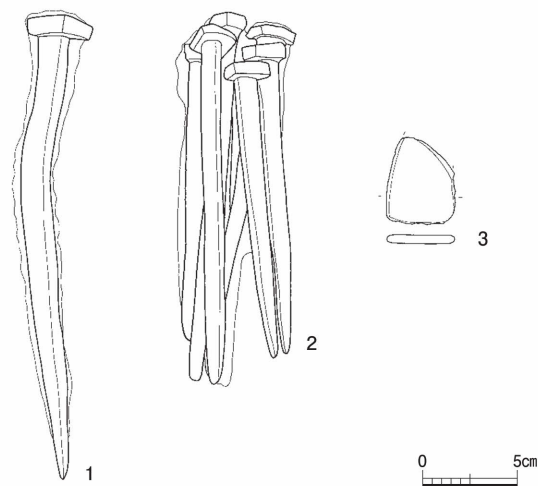


図205 第446次調査出土金属製品 1:4

3本ある。SB19340の柱抜取穴より出土した。3は不明鉄製品。長さが4.6cm以上で厚さが0.5cmの板状である。（国武）井戸枠 SE19346の井戸枠は3段分、合計12枚が残存し、下段2段分の8枚が良好に残存する。また井戸枠を留めるための鼻栓も出土している。井戸は井籠横板組で、東西面と南北面で横板の形状が異なる。

東西面の板は、長さ210.0～216.9cm、幅24.5～26.0cm、厚さ5.0～6.8cm。両端附近に、長さ約10cm、幅約10cmの柄穴を穿ち、上下面中央部には長さ約5.5cm、幅約2cm、深さ約4cmの太柄穴を穿つ。なお一部の太柄穴には太柄が残る。表面はチョウナ仕上で、柄穴や太柄穴はノミで加工する。なお柄穴の加工の際には墨出しをおこなっており、西面最下段の材には墨線が残る（図207）。ただし墨線と柄穴の位置に約1.5cmのズレがあり、計画通りの施工とはならなかった様子がみとれる。なお、逃げ墨はみられない。

南北面の板は、長さ207.9～214.6cm、幅24.4～25.7cm、厚さ5.5～7.0cmで、両端に長さ約20.0cm、幅8.0cmの柄部分を造り出す。柄差部分にはさらに約2.5cm角の角穴を穿つ。表面はチョウナ仕上で、柄部分や太柄穴はノミおよびノコギリで加工する。

井戸の構造は横板を柄差とし、柄先の角穴に鼻栓を挿して井籠組として一段を構成し、上下の段を太柄によって結合する（図208）。この柄差の先に鼻栓を用いる構造は珍しい。なお建築部材などからの転用に関わる痕跡は見られない。

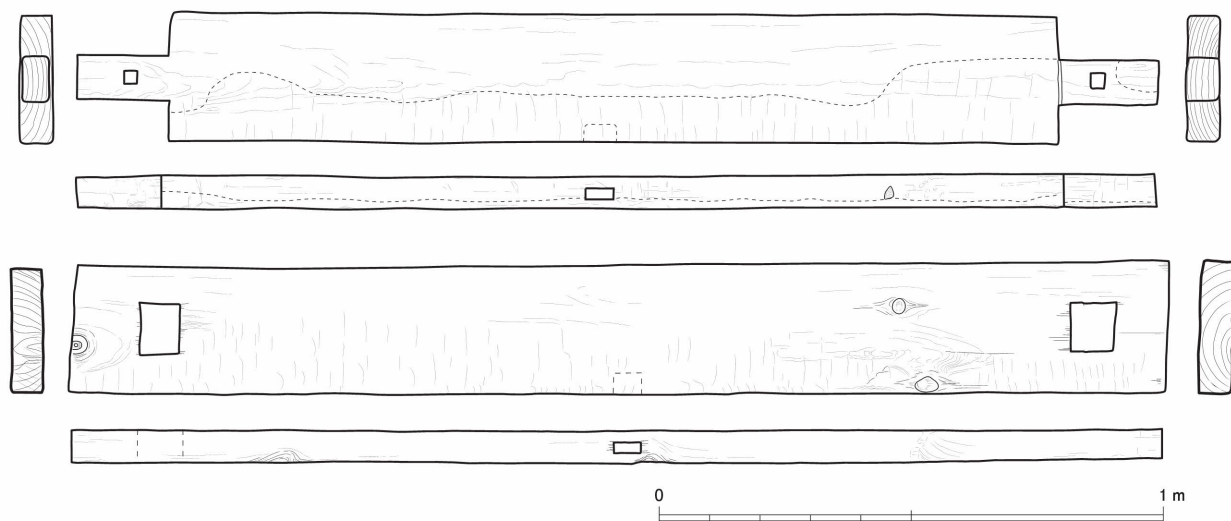


図206 SE19346井戸枠実測図 1:15 (上:北面最下段 下:西面最下段)

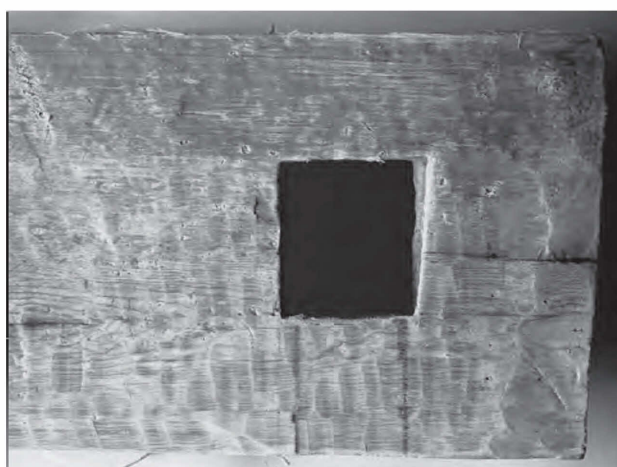


図207 SE19346井戸枠に残る墨線 (赤外線カメラによる撮影)

つづいて施工について述べる。東面最下段の板では上面のみではなく、下面にも太柄穴を穿つ。これに対し、2段目の下面には太柄穴はない。これは施工ミスもしくは計画変更であると考えられる。

また柄穴は柄差部分よりも約10mmほど大きく、施工のための逃げとみられる。ここから地上で4枚の板を1段分として組んで、それを積むのではなく、板を一枚ずつ積んで組み上げたと考えられる。(海野 聡)

4 第469次調査

基本層序と検出遺構の概要

調査区の西部と東部で土層堆積が異なる。西部では、表土、水田耕作土、床土、灰褐色礫層、灰褐色土層、白色粘土層、黒色砂層、黄白色粘質土層、黄褐色砂礫層(地山)と続く。これに対して、東部では、床土の下位に、黄褐色土層、灰褐色土層、黄灰色粘質土層、黄褐色砂礫層(地山)と続く。この違いは、後世の水田造成による削平のためで、したがって両者の遺構検出面が異なる。

遺構検出面は、西部では白色粘土層、東側では黄褐色

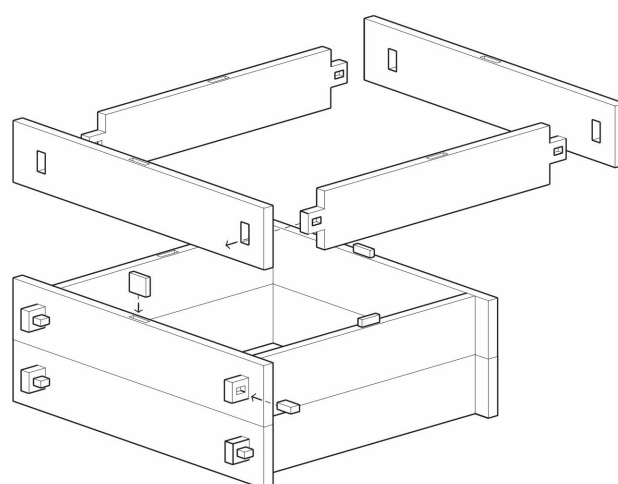


図208 SE19346井戸枠構造の模式図

土層である。ただし、西部では灰褐色礫層から遺物が出土しはじめ、灰褐色土層では多量の土器、瓦が包含されていた。土層観察によると、遺構は上位の灰褐色土層の上面から掘込む(図209)。灰褐色土には奈良時代以降の遺物が含まれないので、奈良時代の整地土と考えられる。地山の黄褐色砂礫層は、東南隅では標高64.8mで検出されたが、西南隅では標高63.5mでも検出されず、東から西へ低くなる。この状況は北側でも同様である。東北では地山が標高64.6mで確認できるが、西北では、標高63.8mでも確認できていない。したがって、奈良時代以前には、調査区の西方に、北から開析する緩やかな谷地形があったと考えられる。地山の上層には、西側ほど奈良時代とそれ以前の遺物を含む整地層が厚く堆積しているため、奈良時代にいたって大規模に造成されたと考えられる。

検出した遺構は、建物8棟(SB19460・19350以外は掘立柱建物)、塀17条、溝10条、土坑1基である(図210)。第446次調査と同様に重複関係や柱筋の位置から判断して1~6期に区分した。(芝康次郎)

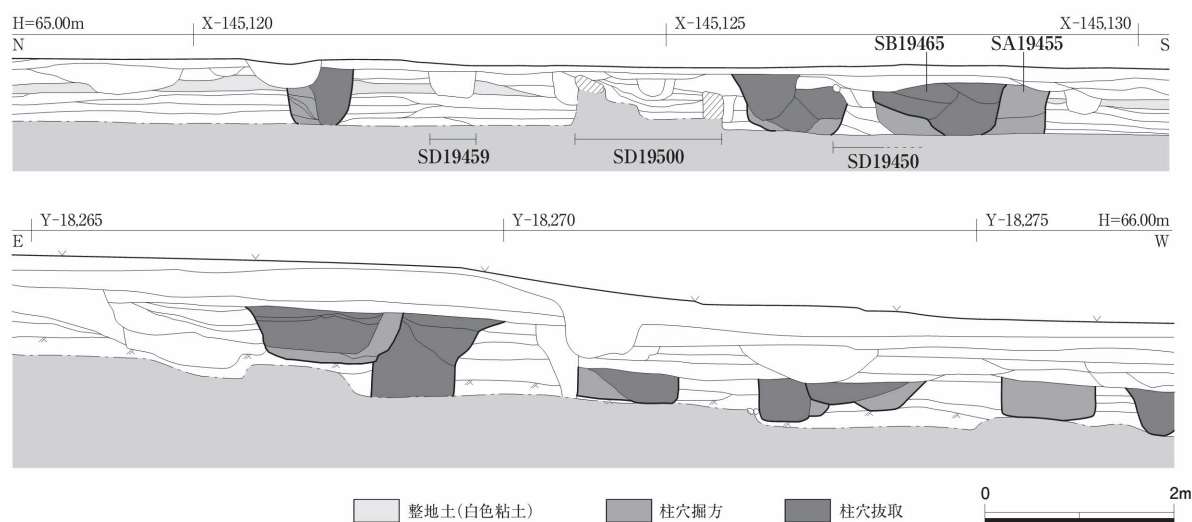


図209 第469次調査土層断面図 (上：南北群 下：調査区南壁) 1：80

1期の遺構

SA19451 柱間3m(10尺)等間の掘立柱南北塀。柱掘方は0.8～1m四方。2間分検出した。第446次調査で検出した南北3間、東西4間の総柱建物SB19330と柱筋を揃える。この建物の西側柱か、柱筋を揃える別の建物あるいは塀の可能性がある。柱穴のうち2カ所の断割調査の結果、底面で木製の礎板を確認した(図211・212)。

SA3099 柱間約3m(10尺)等間の掘立柱南北塀。柱掘方は1m四方。第22次南調査区で検出した6間のうち、2間分を再検出した。

SA19452 柱間3m(10尺)等間の掘立柱南北塀。5間分検出した。さらに北に延びる可能性がある。南北塀SA19451と柱筋をそろえるが、10尺等間では接続しない。柱抜取穴より軒平瓦6721Hが出土した。

SA19453 柱間3m(10尺)の掘立柱東西塀。7間分検出した。東端で南北塀SA19452に接続する。第446次で検出した東西塀SA19331から北に160尺の位置にある。

SA19463 柱間3m(10尺)の掘立柱東西塀。5間分検出した。柱掘方は1m四方。SD19450の北に並行する。

SD19450 調査区の中央に位置する東西溝。幅1m、深さ0.5mで、長さ約18m分を検出した。さらに東西に延びる可能性がある。3期の石組溝SD19500と幅や埋土が類似する。東端北岸には石列が残存し、石組溝SD19500のクランク状屈曲部と重複し、この石組よりも古い(図215)。

2期の遺構

SA19454 柱間2.4m(8尺)等間の掘立柱東西塀。柱掘方は0.8m四方。7間分検出した。

SA19455 柱間は3m(10尺)等間の掘立柱東西塀。柱掘方は約1m四方。4間分検出した。さらに東西に延び

る可能性がある。3期の建物SB19465の柱穴より古い。

SB19460 桁行4間、梁行2間の東西棟礎石建物。柱間は桁行が9尺、梁行が11尺。東西溝SD19457・南北溝SD19458・東西溝SD19459によって、北・東・南を区画される。西は南北溝SD19461により区画されるか。3期のSB19470の柱穴より古い(図214)。建設は1期に遡る可能性もある。

SD19500 SA19463の北側に位置する。幅約1mの石組溝。長さ25m分を検出した。調査区東端ではクランク状に屈曲する(図215)。調査区外の東西に延びる可能性がある。径30～60cmほどの安山岩礫を並べ南北の側石とするが、北の側石はほとんど抜き取られている。底には1辺20cmほどの平滑な礫を2列に並べ底石とし、その間には小石を詰める。溝の深さは0.5mで、埋土は大きく3層に分かれる。最下層は5cm前後の小礫を含む砂層。3層とも、多量の土器・瓦を含む。

SD3180 第22次南調査区で検出されていた東西溝。底石5m分を再検出した。幅約0.8m。さらに西に続く。東は斜行溝SD3154に壊されるが、南北溝SD19461に接続する可能性がある。

SD19457 素掘りの東西溝。幅約0.5m、深さ約0.1m。長さ約16.5m分を検出した。東端で南北溝SD19458に、東端より約3.5m西で南北溝SD19462に接続する。西端は斜行溝SD3154に壊されるが、南北溝SD19461に接続するとみられる。礎石建物SB19460の北を画する溝で、雨落溝の可能性もある。

SD19458 素掘りの南北溝。長さ12.5m、幅約1m、深さ約0.15m。北端で東西溝SD19457に、南端から約1m北で東西溝SD19459に、南端で石組東西溝SD19500に、それぞれ接続する。南端では、多量の瓦がSD19500に流

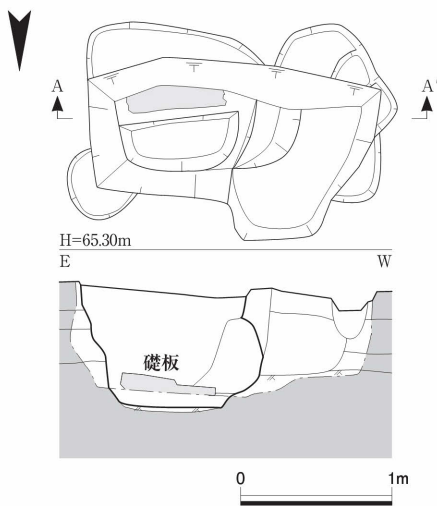


図211 SA19451柱穴断面図 1:50



図212 SA19451礎板出土状況 (北から)

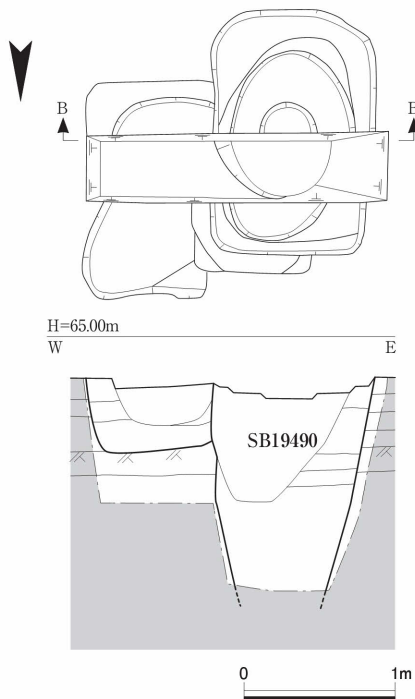


図213 SB19490柱穴断面図 1:50

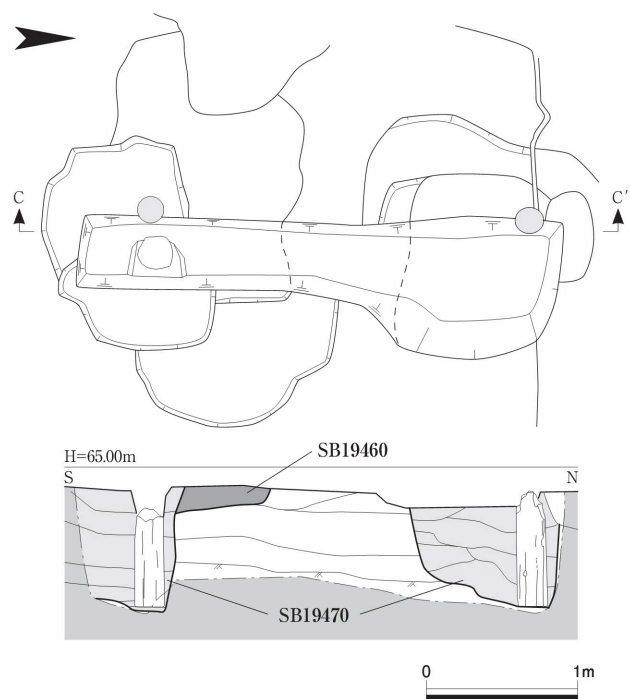


図214 SB19460・SB19470柱穴断面図 1:50

新しい。

SB19465 桁行5間、梁行2間の東西棟掘立柱建物。柱間は2.7m(9尺)等間。SB19470、第446次調査のSB19345と中軸を揃える。抜取穴から軒平瓦6663Bが出土した。

SB19470 桁行5間、梁行2間の三面廂付東西棟建物。身舎柱間は2.7m(9尺)等間、廂の出は東西が9尺、南が5尺。22基の柱穴のうち11基で柱根が残る。柱根は径約20cm。柱掘方は約1m四方で、北壁に接するように柱を立てる(図214)。建物SB19465、第446次調査の建物SB19345と中軸をそろえる。

4期の遺構

SA19466 柱間は3m(10尺)等間の掘立柱南北塀。柱掘方は0.8~1m四方。2間分検出した。SB19350の西

側柱筋から3.5m(11.5尺)離れる。

SB19350 東西2間、南北9間の南北棟礎石建物。第446次調査区で南半の6間分は検出されており、北側の柱穴7基を検出した。柱間は3m(10尺)等間。柱掘方は約1.2m四方。根石とみられる石が残り礎石建物の可能性がある。

SD19337 第446次調査区からつづく南北溝。SB19350の東側柱列から1.5m(5尺)離れる。幅は0.5m。10m分を検出した。SB19350の東雨落溝の可能性はある。

5期の遺構

SB19365 東西6間、南北3間の総柱建物。柱間は3m(10尺)等間。柱掘方は1m四方。第446次調査区から続く建物で、西北隅の3基分を検出した。

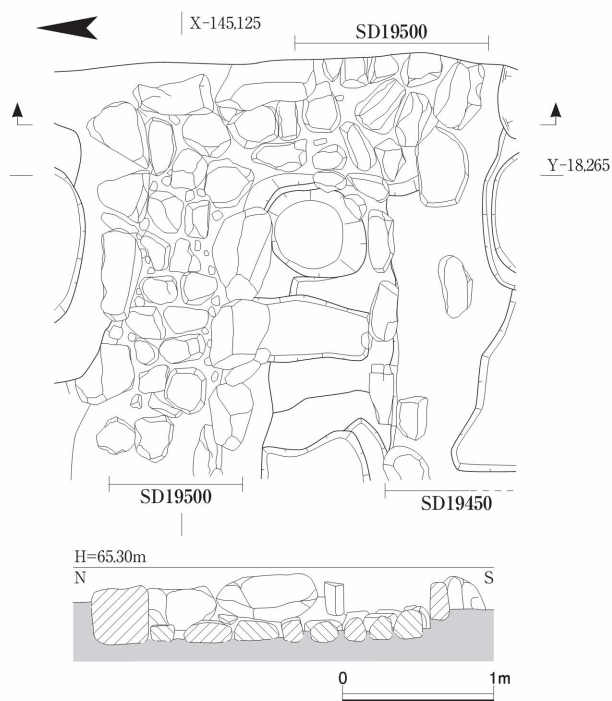


図215 石組溝SD19500平面図 1:50

SA19467 柱間2.7m (9尺) 等間の掘立柱東西塀。柱掘方は1m四方。5間分検出した。第22次南調査区で検出したSA3178と一連の遺構の可能性がある。

SA19474 掘立柱東西塀。1期のSA19463とほぼ重複する位置にある。柱間は3m (10尺) 等間。5間分検出した。さらに東西に延びる可能性がある。柱抜取穴は径0.5mで、多量の炭化物を含む。石組溝SD19500の裏込土よりも新しい。

6期の遺構

SA19468 掘立柱東西塀。柱間は3m (10尺) 等間。柱掘方は1m四方。7間分検出した。SB19475と柱筋をそろえ、その北側柱列から6m (20尺) 離れる。東西へ延びる可能性がある。

SA19469 掘立柱東西塀。柱間は3m (10尺) 等間。柱掘方は約1m四方。7間分検出した。さらに調査区外の東西へ延びる

SA19471 掘立柱東西塀。柱間は3m (10尺) 等間。柱掘方は東西1m南北0.6m。4間分検出した。西に1間延びる可能性がある。SA19469から南に4.2m (14尺) 離れる。

SB19475 桁行2間以上、梁行2間の東西棟掘立柱建物。柱間は3m (10尺) 等間。柱掘方は0.8～1m四方。東方へ延びる可能性がある。

時期が特定できない遺構

SB19480 東西5間、南北2間以上の東西棟掘立柱建物。柱間は3m (10尺) 等間。柱掘方は0.6～1m四方。さらに調査区外の北方へ延びる。検出した10基の柱穴のうち8基で、径16～25cmの柱根が残存する。残る2基も柱



図216 石組溝SD19500検出状況 (西から)

痕跡が明瞭に確認できる。

SA3177 第22次南調査区で検出されていた東西塀。東端の1間分を再検出した。柱間は2.5m (8.5尺)。

SA3178 第22次南調査区で検出されていた東西塀。東端の1間分を再検出した。柱間は不揃いだが、東から2間は2.7m (9尺)。5期のSA19467と一連の遺構の可能性がある。

SA19472 斜行溝SD3154と向きを揃える塀 (1間)。柱間は3m (10尺)。柱掘方は1.2m四方。

SD3154 第22次南調査区で検出されていた斜行溝。自然流路と考えられるが、その東岸には巨礫が認められ、簡易な護岸施設があった可能性がある。2期の東西塀SA19454より新しい。複数の時期にわたって機能した可能性がある。

SK19473 調査区南半東寄りで検出した大土坑。南北3.6m、東西5.5m以上で、不整形を呈する。深さは約20cm。西端は水田の造成時に壊される。埋土に多量の土器・瓦、及び炭化物を含む。3期の建物SB19465の柱穴を壊しており、それ以降の土坑である。

SB19490 桁行2間以上、梁行2間の東西棟掘立柱建物。柱間は3.3m (11尺) 等間。さらに調査区外の東へ延びる。

(芝・桑田訓也)

出土土器

第469次では、整理箱でじつに169箱の土器が出土している。出土土器のうち灰褐色土出土の土器が120箱を占め、ことに石組溝SD19500の周辺およびその上位層で出土したものが多。上位層の灰褐色土の一部は、この溝の埋土上部にあたる可能性がある。土師器は細片が多く、

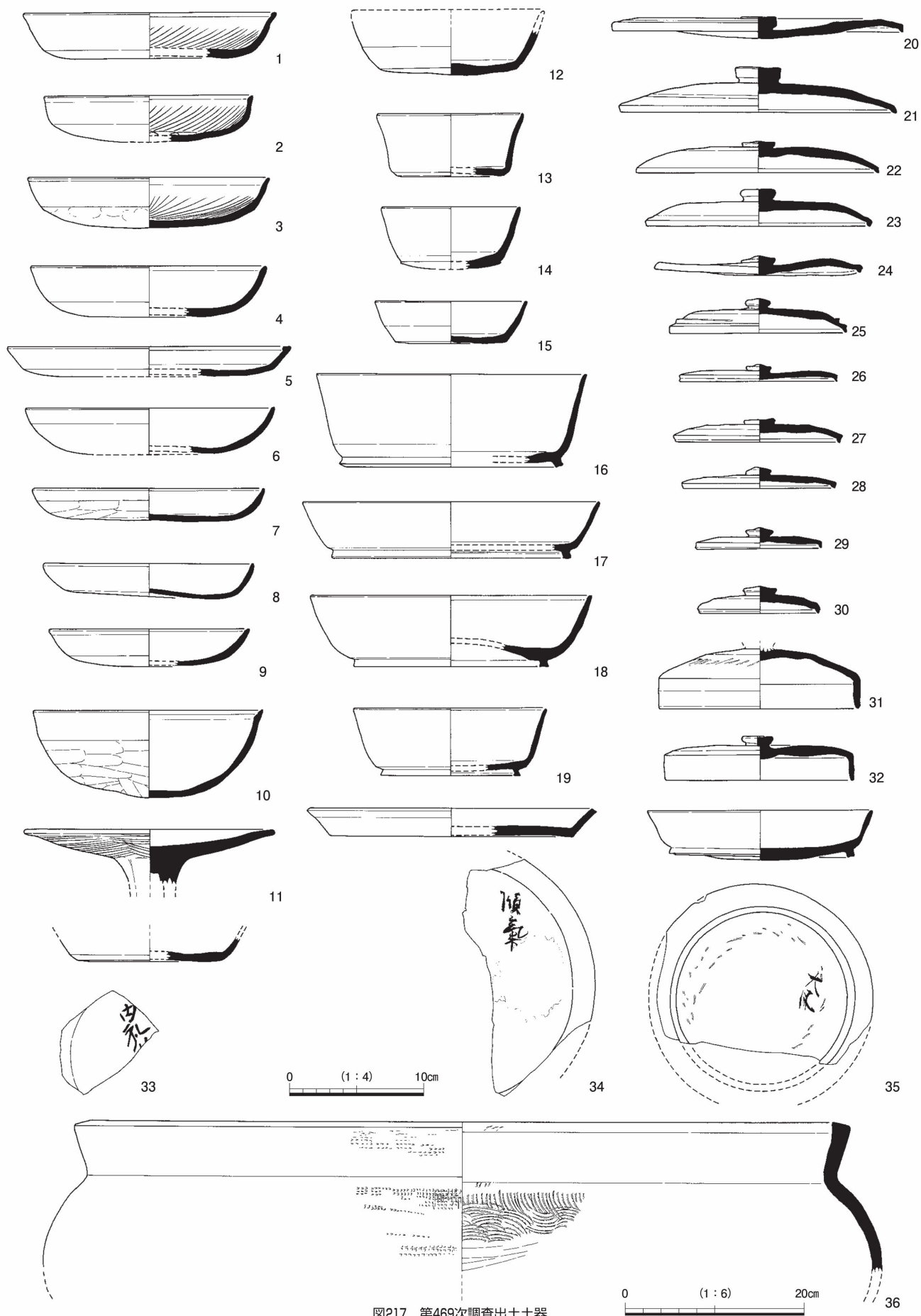


図217 第469次調査出土土器

保存状態がわるい。一方、須恵器は杯A・杯Bや杯B蓋などの食器類のほか、甕の口縁部から胴部にかけての破片が多い。石組溝SD19500からも土師器食器・須恵器食器などが出土しており、灰褐色土の土器とは内容が類似する。以下、SD19500および灰褐色土の土器を中心に述べる。

土師器 杯A I (1: 灰褐色土) はb手法によるもので、内面に1段斜放射暗文を、外面に間隔の広いヘラミガキを施す。杯Cはa手法で1段斜放射暗文を施すもの(2・3)と暗文をもたないもの(4)とがある。いずれもSD19500出土。皿A I (5: 灰褐色土) は口縁端部が内側に巻き込むタイプで、a手法による。皿A IIは内彎気味の口縁部と丸い口縁端部をもつもの(6~9: 灰褐色土)を示す。なお、杯Aや杯C、皿A片は、これら以外にも内面に1段斜放射暗文をとどめた例がある。鉢E (10: 灰褐色土) はほぼ半球形の底部にヘラケズリを施し、口縁部上半をヨコナデで仕上げている。高杯(11: SD19500)は杯部外面をヘラミガキで仕上げている。脚部は断面十角形を呈する。

須恵器 杯Aは口径14cm前後の杯A III-1 (12)と、口径10~11cm台の杯A IV-1 (13~15)とを示す。いずれもSD19500の出土。杯Bは口径20cm前後の杯B Iから、口径10cm台の杯B Vまでと法量分化が進んでいる。杯B Iは器高が大きい一群(B I-1: 16)と、器高が小さい一群(B I-2: 17・18)からなる。同様に、杯B IIIにも器高が大きい杯B III-1 (19)と、器高が小さい杯B III-2とがあり、これ以外に口径10cm台の杯B Vもある。16のみSD19500の出土で、これ以外はSD19500付近の灰褐色土からの出土。杯B蓋には杯B I蓋(20・21)、杯B II蓋(22)、杯B III蓋(23・24)、杯B IV蓋(25~28)、杯B V蓋(29・30)がある。20は断面四角形のつまみを付すもので、墨痕から転用硯とわかる。25は頂部内面に自然釉がかかり、頂部外面には焼成時に付着した杯の口縁端部が残る。壺A蓋は頂部が笠形を呈する個体(31)と、頂部がほぼ平坦な個体(32)とがある。ともに灰褐色土の出土。

甕類は胴部から頸部・口縁部の破片が多数出土しているが、細片が多く復原できる個体がない。36は甕の口縁部。復原口径は約85cmである。灰褐色土の出土。

墨書土器 33~35は墨書土器。33は第22次埋め戻し土の出土で、須恵器杯Aの底部に「内礼□」と記す。34

表33 第469次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦 型式	軒平瓦		その他				
	種	点数	種	点数			
6131	B	1	A	9	隅切平瓦	3	
6135	Ba	1	B	6	隅欠平瓦	1	
	B	1	F	1	鬼瓦	4	
	C	2	?	3	磚(緑釉)	2	
	E	1	D	2	割鬘斗瓦	8	
	?	1	F	3	鬘斗瓦	2	
6140	?	1	K	1	道具瓦	7	
6151	Ab	1	A	1			
	A	1	6665	A	1		
6160	A	1	6666	A	5		
	Ba	1	6667	A	1		
6282	B	4	6685	?	1		
	B	4	6688	Aa	1		
	Ca	7		Ab	1		
	E	2	6691	A	1		
	G	5	6719	A	3		
	Ib	1	6721	C	3		
	?	1		D	2		
	B	4		F	1		
	C	4		Ga	7		
	D	1		Gb	1		
Ec	2		G	4			
E	2		H	4			
?	1		?	7			
6304	C	1	6732	?	1		
6308	Aa	3	重弧文(白鳳)	1			
	A	4	型式不明(奈良)	13			
6311	B	1	型式不明	2			
	?	1					
	Aa	1					
	D	1					
	E	1					
6316	B	1					
6318	Ab	1					
巴(中近世)		1					
型式不明(奈良)		40					
軒丸瓦計		103	軒平瓦計		85	その他計	27
丸瓦			平瓦			凝灰岩	
重量	699.633kg	2130.88kg	80.675kg	64.849kg			
点数	6512	27946	81	18			

は須恵器皿Cで、底部外面に「順気」との墨書がある。35は須恵器杯B III-2で、底部外面に「大□」と記す。SD19500の出土。墨書土器はこれら以外にも出土しており、「大宅大人」や「船□」、「益足」、「真梗」など人名を思わせる墨書がある。このほか刻書土器で、須恵器甕の頸部付近に「稲」と刻んだものが出土している。石組溝SD19500や灰褐色土の土器は、①土師器食器の一部が1段斜放射暗文をもつことや、②須恵器杯A・杯Bで器高の大小が出揃っているとみられることなどから、概ね平城宮土器Ⅲに比定できるであろう。(森川)

出土瓦磚類

第469次調査区から出土した瓦磚類を表33に示す。周辺の調査区と比較した、今回の調査区の瓦出土状況の特徴は、すでに167・168頁で説明した。包含層から多くの瓦が出土したことも目を引くが、その評価や解釈は今後の検討課題である。

軒瓦は東院地区で一般的に見られる型式が多いが、東院地区での出土が多く、葺棟等への使用が想定される小型瓦の6314-6681型式、6313-6685型式の組合せは、6685型式が1点出土したのみであり、今回の調査区の屋根瓦の葺き方の特殊性を物語る。瓦編年Ⅰ~Ⅱ-1期

の軒瓦が比較的多いことはすでに説明したが、最も多いのは瓦編年第Ⅱ-2～Ⅲ期（天平初年～天平勝宝年間 [729～757]）の軒瓦であり、東院地区の他地域と共通する。ただし、瓦編年第Ⅳ-2期（神護景雲元年 [767]）以降の軒瓦は少なめで、うち3点は東院玉殿所用とされる6140（種不明、1点）、6151A（2点）である。

鬼瓦は平城宮式鬼瓦Ⅱ式A1が1点、同Ⅱ式A2が1点、同Ⅱ式B1類が2点である。なお隣接する第401・423次調査区で多く出土した緑釉磚が2点出土している。

（清野）

出土金属製品など

金属製品 銅製巡方2点、佐波理碗片1点が出土した。図218-1は巡方の表金具。表面には黒漆が全面的に残り、裏面四隅には鋳足が鋳出される。現寸法は、横3.3cm、縦3.1cm、厚さ0.55cmである。SD19500より出土。図218-2は平板形式の表金具。現寸法は、横2.1cm、縦1.8cm、厚さ0.17cmである。佐波理碗は、口縁部の約5cmが残る。口唇部がやや外反する。破損後叩きのぼしている。

銭貨 斜行溝SD3154より神功開寶が1点出土した（図218-3）。功の旁を「刀」とつくり、開の構えを「門」とつくる神功開寶Aである。

石器 黄褐色土中および柱穴埋土より、サヌカイト製の石鏃1点、スクレイパー1点、剝片数点が出土した。

（芝）

5 遺構変遷

以上では、第446・469次調査について、個別に述べたが、隣接する調査区を視野にいれながら、両調査区における遺構変遷を考えたい（図219）。なお各期の時代の比定については、既報告（「平城第421・423次調査」『紀要2008』）における解釈を踏襲した。

1期 幅約15m（50尺）の東西通路SF19334があり、その南に東西棟回廊SC19335が、北に総柱建物SB19330が配置される。SB19330の西側柱筋からは北へと南北塀SA19451が延び、その北側に東西溝SD19450を隔てて南北塀SA19452が、東西を区画している。SA19451の南端から、SA19452の北端までは、約48.4m（160尺）である。ただしSA19451・19452は、SB19330のように、東に展開する建物となる可能性がある。なお2期に振り分けた東西棟礎石建物SB19460は、建設がこの時期に遡る可能

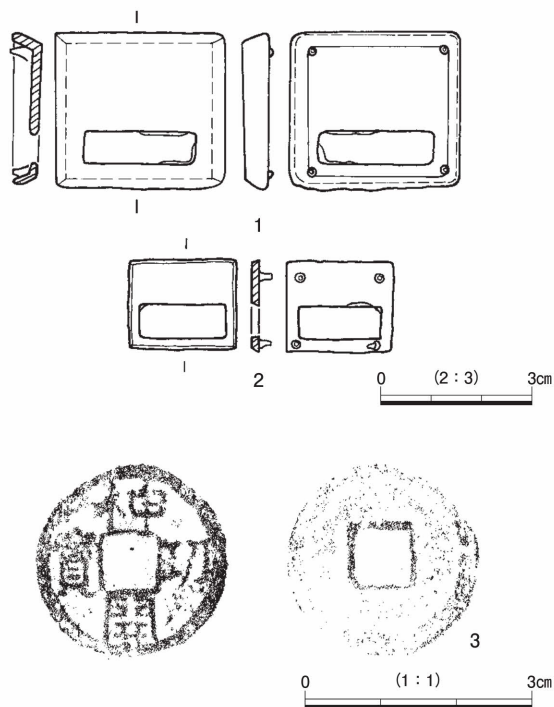


図218 第469次調査出土金属製品・銭貨

性もある。奈良時代前期に比定される。

2期 1期の通路の南を区画していたSC19335が壊され、総柱建物SB19340が建てられる。通路の北側の区画は遺存していたと考えられる。その区画の北側には東西棟建物SB19460が配置され、その南の東西溝SD19450が埋め立てられ、SD19500へと付け替えられるほか、SD19437・19458・19459・19461がSB19460の周囲に掘りめぐらされる。平城還都（天平17年、745）まもなくの頃に比定される。

3期 南側では総柱建物SB19340が壊され、南寄りに同じく総柱建物であるSB18760が建てられる。北側ではSB19460にかわり、三面廂付東西棟建物SB19470が建てられ、その南には、東西幅と中心軸を同じくして、SB19465とSB19345が建てられる。SB19345の建設にあたっては、1期の東西塀SA19331・19332が壊されたものと考えられる。これにより、1期の東西通路SF19334はその区画施設を失った。なおこの時期に、今回の調査区の南東には回廊SC19112・19113で囲まれる院空間が存在する。およそ天平勝宝年間（749～757）頃に比定される。

4期 1期の東西通路のほぼ中心に東西塀SA19336を配置し、再び南北を区画する。この東西塀と柱筋をあわせ、南に東西棟建物SB19360を、北に礎石建物の可能性がある南北棟建物SB19350・東西棟建物SB19355を建てる。SB19350の建設にあたっては、3期の中心軸を同じくす

る建物群のうち、少なくともSB19465・19345は壊されている。天平宝字年間（757～765）頃に比定される。

5期 4期のSB19350・19360を壊し、中心軸と東西幅を同じくする総柱建物群を建てる。4期の東西塀SA19336の南側には総柱建物SB18770が建ち、さらに南にもSB17800・17810・17820が建ち並ぶ。また東西塀北側にも同じ中心軸と東西規模をもつSB19365が建ち、高い計画性が読み取れる。SB18770の西に建つ東・南の2面に廂をもつSB9640も南北の柱筋を同じくする。なお調査区の南東では、3期の回廊のさらに東に回廊SC19050で囲まれる新たな院空間が造られている。およそ天平神護・神護景雲年間（765～770）頃に比定される。

6期 4期の東西塀SA19336が廃され、1期の通路とやや南寄りに、東西塀SA19341・19342とSA19339に挟まれる幅約14.8m（50尺）の通路SF19344が形成される。通路の西では軸を同じくする基壇をもつ門遺構SB3116が検出されている。通路南側では、東西塀SA19339と南北塀SA17817およびSA9605で囲まれる南北約47.2m（160尺）の区画が形成される。この区画内にはSB9640、SB18770は存続していた可能性がある。

なおSA9605の南には、幅約10mの東西通路が形成されている。SF19344の北側にもやはり、東西塀SA19341・19342、南北塀SA19338、東西塀SA19468で囲まれる南北160尺の区画が形成され、さらにその中心を東西塀SA19469で2分する。南の区画には総柱建物SB19370が建てられ、SA19341・19342の北には井戸SE19346が掘られ、覆屋SB19375がかけられる。SF19344をはじめとする東西通路が複数通るこの時期は東院西辺部がきわめて整然と区画された時期といえる。中でも幅50尺と規模の大きな通路の存在は、調査区の東にこの時期の東院の中核部が位置することを推測させる。およそ宝龜年間（770～780）頃に比定される。

（国武・鈴木・芝・桑田）

6 まとめ

第446次調査 第446次調査区では、西の第22次南調査区で検出した基壇をもつ門SB3116に接続する幅14.8m（50尺）の東西方向の通路を検出した。南の調査区外で検出していた大規模な総柱建物群が、第446次調査区にも続くことが判明した。ただし東西方向の通路は1期と6期、

大規模建物群は2・3・5期と、時期が異なる。また東院西北部では、総柱建物群は従来3期から確認されていたが、2期までさかのぼることもあきらかになった。

さらに、東院中枢部における第421次・423次調査では5時期の遺構変遷を確認していたが、今回の調査では従来のⅢ期とⅣ期の間に新しく1時期加わり、6時期の変遷を確認した。この新しく加わった4期は、総柱建物群が形成された2・3期の後に東西棟建物と南北棟建物が内庭を形成するように口字形に建ち並ぶ配置をとり、5期には再び総柱建物群が形成されることから、前後の土地利用を断絶する時期にある。つまりこれまで東院西北部は倉庫が連立する空間として理解してきたが、今回の調査においてそれが断絶する時期が、その間にあることが判明した。このような断絶が部分的なものなのか、東院地区全体にかかわるものなのかは、今後さらなる検討を要する課題である。

（国武・鈴木）

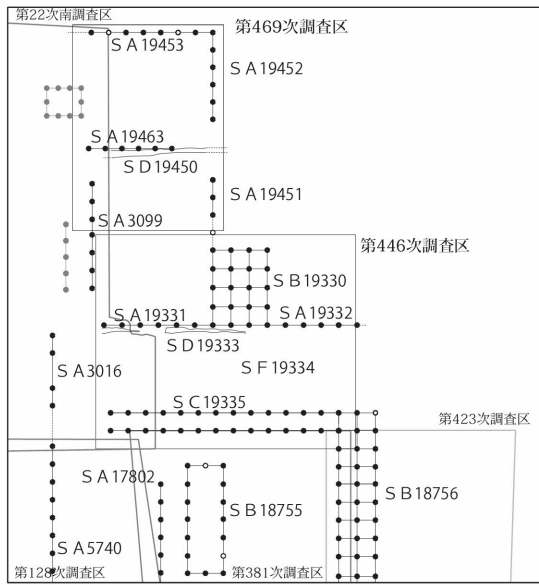
第469次調査 検出した遺構は少なくとも6期に区分できる。注目されるのは調査区中央部の東西塀と石組溝である。これらは両者ともに建て替えや付け替えで数時期にわたる利用が見られる。これらの塀や溝をまたぐ遺構は確認できず、各時期を通じて、調査区中央部を境界として南北2つの空間に分かれていたと考えられる。

この境界の南北で様相が異なることは、建物の柱間や掘方の寸法、出土遺物量の多寡にも見ることができる。建物の柱間や掘方の寸法をみると、南側に大規模なものが多く、北側に小規模なものが多い。遺物は瓦・土器ともに多量に出土しているが、特に北側で多い傾向がある。

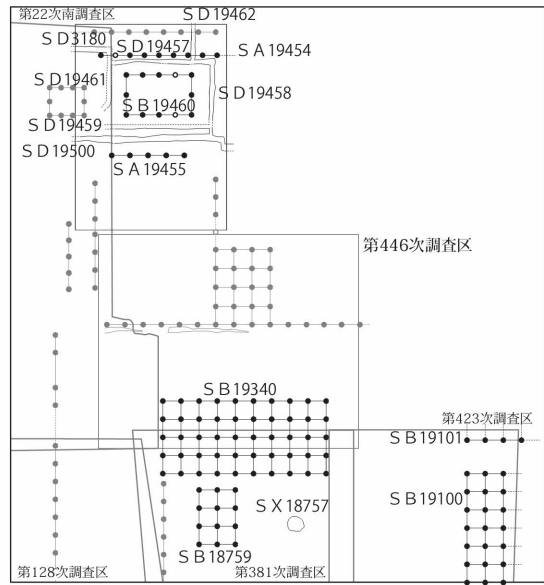
出土土器には食器類や須恵器甕が目立つ。これは、東院での人々の生活を支えるバックヤード的な機能を備えた空間が、付近に存在したことを示している。出土位置に照らすと、そうした空間が今回の調査区より北側に存在した可能性を示唆する。いっぽう、瓦の出土量の多さは、総瓦葺建物の存在を想起させる。奈良時代前半の軒瓦が比較的多く出土したことも、これまでの調査成果とは異なる知見である。

こうした状況は、第469次調査区の南にある、大規模な総柱建物群が展開する空間とは、性格を異にする可能性を示している。空間の性格とその境界、あるいはそれらの時期的な変遷については、今後、周辺の調査を進めるなかで検討を深めてゆく必要がある。

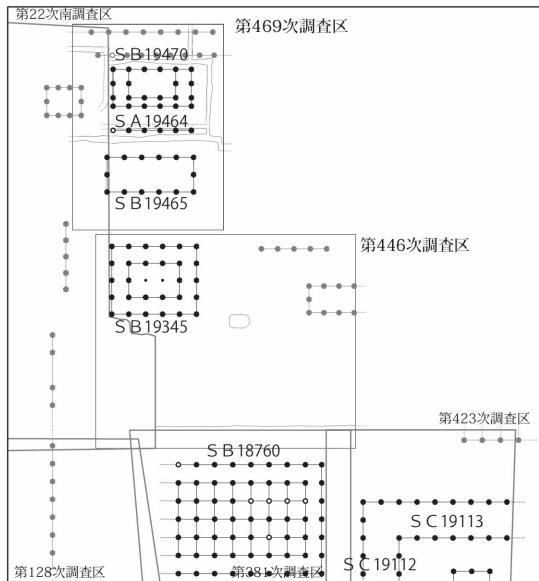
（芝・桑田）



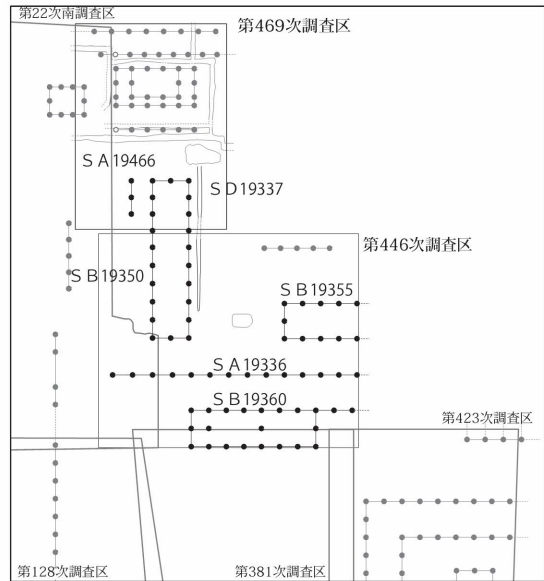
1期



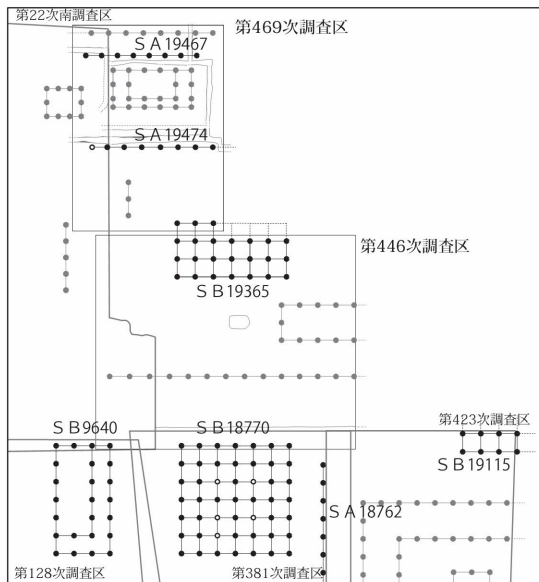
2期



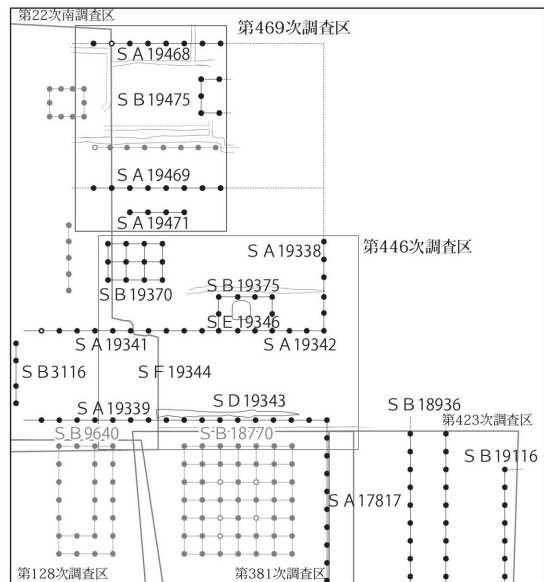
3期



4期



5期



6期

図219 東院地区遺構変遷図（黒色線は各時期に新たに建設されたものを、灰色線は存続していた可能性のあるものを示す）